HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	二人称断定文について
Author(s)	臼渕, 幸子
Citation	独語独文学科研究年報, 22, 1-10
Issue Date	1996-01
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/26019
Type	bulletin (article)
File Information	22_P1-10.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

二人称断定文について

臼渕　幸子

0. 序

かつて、中学校で最初に習う英語の教科書は、"I am...", "You are..." で始まったというが、どちらもよく使う表現とは言いがたい。"I am..." は、"I am a student."や "I am very busy." のように、自分の立場や状態を言及する表現としてはなんら違和感がない。しかし、これが "You are a student." や、"You are very busy." といった二人称断定文となると、不躾な気がして、なかなか言えそうもない。同じ他人事についての断言、"He is a student." 、あるいは "He is very busy."と較べてみても、"You are..." という表現はなかなか使えない表現だという感じがするのである。

そのせいか、いわゆる「コミュニケーション能力」の育成に重点を置いていると思われる最近の教科書では、人称代名詞が一通り導入される第七課にいたっても、"Are you an American?"という疑問文があるだけで、"You are..." で始まる平叙文は登場しない（ONE WORLD, 教育出版）。にもかかわらず、"You are a student." という文の存在の正当性は疑う余地がない。それは、"I am a student." や"He is a student."と同様に文法的であり、しかも単に文法の範列としてあるのではなく、実際に使われる表現としてあるのを私たちは経験から知っている。しかし一体、どんなレベルで使われる表現なのだろう。それを提示することは可能か。

本論では、二人称断定文の用法を、ドイツ語で書かれた任意のテクストの中に見てみたいと思う。従ってまず第一章では、"N is..." （ドイツ語の場合は N + sein の活用形）の形をもつ繋辞文といわれる文の意味的な性質を確認する。さらに二章では、代名詞の性質についてふれ、二人称代名詞について考察し、最後に三章で、ある書簡体小説の中における二人称断定文の用法を分析する。

1. "N is..." という文について

まず、上述の"You are a student."や "He is very busy."といった、 "N is..."の形をもついわゆる繋辞文がどんな意味を持つ文か確認しておきたいと思う。

Kahn(1973) は、be動詞を分析する際、英語の基本文を二つの形式に分け、繋辞 be を定義した。一つは、"John sleeps.", "John loves Mary.", "John speaks to Mary." に代表される、$N\,V\,\Omega$ という形で表されるグループ、もう一つは、下の(1), (2), (3)のように、N *is* Φの形で表される繋辞文である。

(1)John is tall.
(2)John is a man.

(3)John is at the office.

後者はさらに、その繋辞の用法により、二つに下位区分される。今ここで問題にする"N is ..." の文は、そのうちの一つ、上の (1), (2) のグループに相当する。これらの文においては、繋辞 be は、叙述名詞、あるいは叙述形容詞（この場合、それぞれ　a man, tall)を主語 N に帰属させる(assign)働きをしている（詳しくは Kahn(1973)S.7参照）。

さて、(1),(2) において、主語の属性を指定する本質的な情報は、それぞれ "tall", "a man" が担っている。それゆえ、繋辞文における be は、"dummy verb" であると従来よく言われるが、Kahn(1973)によればそうではない。それは、動詞（述語）の具体的な意味と結びついているがために通常は目に見えない定動詞の機能をより分けている(...the copula is the finite verb par excellance because it separates out *the function as such* from the concrete meaning or content which is expressed by other verbs(and by predicate nouns and adjectives.(Kahn(1973) S10)。この意味で繋辞 be は、その文が平叙文であること(declarative sentencehood)を統語的に標示し、それが真であることを断言する叙述記号(a sign of predication)なのである(Kahn(1973; S1-11))。この考え方は、Weinrich(1993) の Textgrammatik での繋辞 sein の取り扱い方とも一致する。繋辞 sein の意味は "Feststellung"（断言すること）にのみ尽きる(Weinrich(1993) 2.5.2.2. 参照）。したがって、"N is ... " という文は、広い意味では主語に対しての断言、もっと詳しく言うと、文中の叙述名詞や叙述形容詞で表される性質などを、主語 N にあるものと断言する文であり、上で問題にした "You are..." （ドイツ語の場合は "Sie sind.../ Du bist...") では、それが「あなた」に対してなされるのである。

2. 人称について

さて、今度はこの「あなた」について考察しなくてはならない。そのためには、二人称単数の代名詞 you (Sie 又はdu) の性質を人称代名詞という語類全体の中で捉える必要がある。ここでは、E. Benveniste(1983) の人称に関する考察に従って、人称代名詞 you の性質を明らかにしたい[注1]。

もう一度最初の文に戻ってみよう。

(4)I am very busy.
(5)You are very busy.
(6)He is very busy.

(4)の I は言うまでもなく、(5)におけるyou や (6) の heも、話し手である「わたし」によって言表されることにかわりはない。しかし、後者の heは、話し手である「わたし」との関係において大きく違っている。二人称である「あなた」は、"わたし(I/ich)" と言う人に話しかけられる人であ

り、この話者による話しかけという行為によってのみ存在しうる。この点で、二人称と一人称は相関関係にある。一人称である「わたし」は"わたし(I/ich)" と言うことによってしか存在しえないし、「あなた」はその「わたし」に、"あなた(you/Sie, du)" と言われることによってしか存在しえない。両者は相互に交換可能で、連続して現れるIやyouが同一人物であることを保証するものは何もないという意味で、その有効性はその都度一回きりである。これに対し、heと同じ類をなす三人称は、この<わたし/ あなた>の話し話しかけられる相関関係の外にある。Benveniste が三人称を、一・二人称に対立させて非＝人称と捉えなおしたゆえんはまさにここにある[注2]。三人称は、話し話しかけのその場にいないものを指すのであり、客観的な一定の指示対象を潜在的に持つことが可能である。例えば下のテクストで、三人称単数の女性代名詞 *sie* が常に一定して *die Königstochter* に還元されるというその恒常性は、三人称代名詞の非＝人称性を基盤とするものである。

(7)Der König ließ aber den Befehl ausgehen, daß alle Spindeln im ganzen Reich abgeschafft werden sollten, welches geschah, und als die Königstochter nun fünfzehenjährig war und eines Tags die Eltern ausgegangen waren, so ging sie im Schloß herum und gelangte endlich an einen alten Turm. In den Turm führte eine enge Treppe, da kam sie zu einer kleinen Tür, worin ein gelber Schlüssel steckte, den drehte sie um und kam in ein Stübchen, worin eine alte Frau ihren Flachs spann. Und sie schertzte mit der Frau und wollte auch spinnen. Da stach sie sich in die Spindel und fiel alsbald in einen tiefen Schlaf...(Dornröschen. In: Die wahren Märchen der Brüder Grimm, Fischer, S18)

又、下の(8)のように、動詞の現在形が二人称を主語にすると命令のニュアンスを帯びることも、二人称の人称性に基づいていると考えることができる。

(8)Sie gehen jetzt sofort nach Hause und legen sich ins Bett!
(Weinrich(1993) S214)

このように、二人称と三人称は、話し手である一人称との関係において明らかに違う。両者とも一人称である「わたし」にとって「他」であることに変わりはないが、二人称は同じ「他」であっても、「わたし」が、話しかけるという行為を通じて、ただそれのみによって創り出す他であり、その同定化は話し手である「わたし」に設定されたまさにその場でのみなされうる。それに対し三人称は、一人称とのそうした相関関係に対して無標である。

話は逸れるかもしれないが、主に英語学の分野で研究されている、いわゆる主節現象(MCP)の問題も、この「人称」との関連において照らしてみると、違った視野を得ることができることをつけ加えたい[注3]。

下の (9)-(12) は、副文に主節現象が起こっている例だが、主節の動詞が同じでも、その主語が三人称だと、that節の中に indeed が現れたり、that節中の語順が変わることが許されない。

(9)a. I think that indeed, they will come.
　b. ??John thinks that indeed, they will come.
(10)a. I regret that never before has such a proposal been made.
　b. *But Bill regrets that never before has such a proposal been made.
(11)a. I realize that standing in the corner was a man with a camera.
　b. ??Look, John realizes that standing in the corner was a man with a camera.
(12)a. I knew that boy, were we in trouble.
　b. ??John knew that boy, were we in trouble.　　(Green(1976) S388)

私がここで指摘したいのは、上に見たBenveniste の人称への考察が、ここでも生かされないだろうかということである。なぜなら、I regret とBill regrets とでは、後に続く従属節の陳述内容に対する話者の関与の仕方は、明らかに違って表れるはずだからである[注4]。従属節における主節現象を大雑把に文中の従属節の強調と考えたとき、この従属節に強調を置かせるような、話者の従節の命題内容に対する関与の仕方（Green(1976)の言い方では話者の同意の度合い）を、人称と動詞が相互に作り出す意味から捉えなおすことはできないだろうか。主節現象に関係する要因は様々で、その問題の範囲は広いのだが、話者の「心的態度」（葛西(1995)）がまさに表明されるものとしての主節動詞と人称の関係をもう一度細かく検討する必要があるように思われる。MCPを研究する数多くの論文の例文に、二人称主語が登場しないこと自体、もう既にMCPと人称の問題が語られているのだから....。

3. 二人称断定文 の用法

このようにみてくると、"You are..." という表現は、文法的には "I am...", "He is..." と同列でも、使用という観点らすると一種異質な表現ということができる。前章で、"You are..." という文は、文中の叙述名詞や叙述形容詞で表される存在性質などが、「あなた」にあるものと断言する文であることを述べた。この「あなた」は、「わたし」が話しかけることによって創り出した、話している「わたし」を含むまさにその場にいる「あなた」である。そうであれば、この「あなた」に内在すべき性質を「わたし」が替わって断言することになるこの表現が、特殊な状況を要することが予測できる。

本章では、この”特殊な状況”がいかなる状況であるかを描き出すために、C.D. Lachlos の書簡体小説「危険な関係」のドイツ語訳をテクストとして選び、その中での二人称断定文をすべて抜き出して分析する方法を採った。以下では、その中からのいくつかが紹介される。この小説は登場人物それぞれの往復書簡からなっている。この小説を選んだ理由は、書簡体という性格から二人称が頻繁に

現れるだろうし、又その分だけ二人称断定文の現れる頻度も高いだろうと考えたからである。そもそも二人称自体が実際に使われる場は話される場においてである。であるから、書かれたものの中での話(わ)の場を分析の対象にするのは、問題があるかもしれない。しかし、この小説の中で登場人物たちの往復書簡が創り出す話し話しかけを、ここでは一つの話のモデルとして考えてみたいと思う。なお、このテクストが書かれたもののさらなる翻訳であるという問題はここでは考慮せず、ドイツ語で表わされた一つの話のモデルとして考えることにする。

次の例を見ていただきたい。(13), (14), (15) ともに、この小説の主要人物、メルトイユ侯爵夫人からヴァルモン子爵に宛てて書かれた手紙の一部である。(13), (14) は同じ日付による一通の手紙の一部である[注5]。

(13)<u>Schüchtern und unterwürdig sind Sie bereits</u> - geradesogut können Sie verliebt sein. Sie verzichten auf Ihre glücklichen Frechheiten, das heißt, Sie handeln ohne Prinzipien, überlassen alles dem Zufall oder vielmehr der Laune. Haben Sie vergessen, daß die Liebe, wie die Medizin, nichts als eine Kunst ist, die der Natur nachhilft?(Lachlos)

(14)<u>Sie sind nicht mehr derselbe</u>. Sie benehmen sich, als ob Sie Angust hatten vor dem Erfolg. Seit wann reisen Sie mit der Schneckenpost?(Lachlos)

(15)Wirklich, Vicomte, <u>Sie sind unausstehlich.</u> Sie behandeln mich, als ob Ihre Maitresse wäre. Wissen Sie, daß ich sehr wütend bin?

(13), (14), (15)とも、下線を引いた文がそれぞれ非難の調子をもっていることが、後に続く皮肉を表す疑問文((13)Haben Sie vergessen...?, (14)Seit wann reisen Sie...?, (15)Wissen Sie...?)からも見て取れる。 ここでは、ヴァルモン子爵がツールベル法院長夫人に放蕩児らしからず恋をしていることを、メルトイユ侯爵夫人が非難している。三例とも、下線の断言を正当づけるための発言が Sie を主語にした現在形の時制で続いている((13)Sie verzichten..., Sie handeln..., (14)Sie benehmen sich..., (15)Sie behandeln mich...)。現在形は「今話しているとき」への関係付けが最も近い時制であるから、その分だけ主観的要素も強い。実際、"Sie あなた" ということ自体、それは誰かを自分（あるいは自分の話(わ)）に関連づけて規定したことに他ならない。その意味で、「あなた」は常に受け身の存在だ。そのうえ、その断言の内容が、「あなた」の外に出る客観的な行為よりも、その「あなた」の内的性質に関わるものであれば、それは自ずから主観的な意味あいを帯び、言われた本人の「あなた」にとっては、至急に何らかの態度決定（同意、否認、あるいは黙殺）を要する緊迫した、時によっては脅威を与える表現となるはずである。この場合のメルトイユ侯爵夫人の手紙にも、それは一種の緊迫感として現れ、やがては「ヴァルモン子爵のツールベル法院長夫人への恋」という事実をめぐって、メルトイユ侯爵夫人のあくなき申し立てと、ヴァルモン子

爵のあくなき否認という言い争いへと緊迫を強めていく((16)参照)。

(16)Können Sie nicht mehr der Liebenswürdigste sein? Und sind Sie Ihrer Erfolge nicht mehr sicher? Gehen Sie doch, Vicomte, Sie tun sich Unrecht! Aber das ist es auch nicht, was ich meine; es ist das, daß Sie sich nicht einbilden sollen, es läge Ihnen so viel daran. Es liegt Ihnen nicht meine Liebenswürdigkeiten. Sie wollen nur Ihre Macht mißbrauchen. Schämen Sie sich, Sie sind undankbar. Das nennt man wohl gar ein Gefühl?(メルトイユ侯爵夫人からヴァルモン子爵への第153信より、Lachlos)

もう一つ例を挙げておく。例は、ヴァルモン子爵から、つれない女性ツールベル法院長夫人への恋文の一部である。

(17)Sie betrachten meine Liebe als eine Beleidigung und vergessen, wenn meine Liebe ein Unrecht wäre, Sie zugleich Ihre Ursache und Entschuldigung sind....Zum Lohn für meine aufrichtigste, zärtlichste Liebe halten Sie mich von sich fern. Und sprechen sogar von Ihrem Haß...Wer würde sich über eine solche Behandlung nicht beklagen? Aber ich unterwerfe mich; ich leide und beklage mich nicht; Sie schlagen und ich bete an. Durch eine unbegreifliche Macht, die Sie über mich haben, sind Sie die umschränkende Herrin meiner Gefühle; und wenn Ihnen meine Liebe allen Widerstand leistet, Sie sie nicht zerstören können, so ist es, weil sie Ihr Werk ist und nicht das meine.(Lachlos)

ここで私たちは、自分の不正(Unrecht) を不運 (Unglück)に置き換えて、その原因(Ursache)を相手に擦り付けるレトリックにおいて、ich と Sie が巧みにすり替えられているのを見ることができる。Sie が常に行為の人であるのに対し、 ich はその行為を受ける受け身の人として登場する(...halten Sie mich von sich fern, Und (Sie) sprechen sogar..., Sie schlagen...に対し、ich unterwerfe mich; ich leide..., ich bete an...)。その中で下線部 "Sie sind..." の文は、いわばそのだめ押しである。

話者となることは、Benveniste の言葉を借りて言えば、ことば全体を専有する(appropriate)ことであり、これによって個人は個々の話を創り出す(It is this property that establish the basis for individual discourse, in which each speaker takes over all resources of language for his own behalf. Benveniste(1971) S220、下線は筆者による)。これがすなわち対話の、ひいてはコミュニケーションの出発点となるのだが、別な見方をすれば、話者は自分の話(わ)の絶対君主である。だから話者がその話の中で、同意も得ずに「あなた」の存在性質を上の例のようなかたちで規定してしまうことは、結果としてはことばの独り占めであり、一つの脅威的な行為

にもなりうると私には思える[注6]。当の「あなた」としては、無視して取り合わないか（もちろん同意することも可能だが）、みずから話者となって反駁するしかない。実際小説の中のやりとりも、そのように展開していく....。

4. まとめ

以上、"Sie sind..." の二人称断定文を、繁辞文並びに人称の性質という二つの観点を織り合わせ、それが一体どのような場で使われるのかの分析を試みた。すでに述べたように、この表現は話者がその話の中で相手の性質を規定してしまう性格をもつゆえに、それは主観的な意味あいを持ち、当の相手に対しては、時によって脅威的でもあるような緊迫感を与える。私たちが例に取った書簡体小説「危険な関係」において、それは登場人物たちの諍いの場に典型的に現れ出ていたと言える。文法的には非常に平凡な文が、使用という観点からすると、実はいささかも平凡ではない。

注：

1. "代名詞の問題は、ことば langage の問題であると同時に言語 langue の問題であること、いなむしろそれがまずことばの問題であるからこそ、はじめて言語の問題でもあるのだ... (Benveniste (1983) S243)"。言語における人称は、人称代名詞だけが担う観念ではない。それは、動詞の人称変化や副詞といった文法範疇にも広がって表れる観念であり、又各言語ごとに様々な現れ方をすることが同書に指摘されている。本章では、ことばの問題として人称の特質をふまえたうえで言語における人称代名詞の性質を考察するという Benveniste の立場に従って、特に人称として「あなた」が語られるときは「　」でくくった。「わたし」に関してもこれは同様である。なお本論では、E. Benveniste, Problémes de linguistique générale(1966; Éditions Gallimard, Paris)の日本語訳、「一般言語学の諸問題」（みすず書房・岸本通夫　監訳、１９８３）並びに同書の英訳 Problems in General Linguistics(1971; University of Miami Press; translated by M.E. Meek) を参照にした。

2. この考え方は、Weinrich(1993) の人称代名詞の取り扱いにも受け継がれている。それにおいては、一・二人称と三人称の対立は、それぞれ Gesprächsrollen, Referenzrollen というコミュニケーションにおける役割の違いとして捉えられる。Gespräch は、Rede、あるいは Unterredeung （独白、対話も含めて話すこと）を意味する。Benveniste のいう意味での人称代名詞 Ich と Du は、話し話しかけられる役割をにない、それ以外は、指示する役割を担うものとして捉えられる。なお、同じく Weinrich の「言語とテクスト」（１９８４、脇坂　豊・他訳）では、この三者はコミュニカント（コミュニケーションするもの）として捉えられ、それぞれ送り手、受け手、指示対象という用語が与えられている。

3. 主節現象(Main Clause Phenomena)とは、通常主節では全く問題ない語順の変化や強意の副詞の共起が、従属節では文法的に許容されない文になってしまう現象をいう。具体的には次のような例を挙げることができる。

(i)a. Never before have prices been so high.
b. *Nixon regrets that never before have prices been so high.
(ii)a. Into the garden ran a golden-haired girl. Into the garden she ran.
b. *I guess that into the garden ran a golden-haired girl.
(iii)a. Indeed, languages must have nasal assimilation rules.
b. *Sidney regrets that indeed, languages must have nasal assimilation rules.
(Green(1976) S383)

この現象が言語学者を悪戦苦闘させるのは、こうした語順の変化や強意の副詞が、必ずしも主節に限らず、時に副文でも起こり得るからであり、又、それがどんな環境の下に起こるのか、その条件を設定できないことである。副文での主節現象を可能にする環境には、主節の動詞の意味内容の他にも、時制、法など実に様々な要因が絡み合っていることが知られているが、主節の主語の人称も、そうした要因の一つをなしている。(主節現象は、Negative Adverb Raising, Participial Phrase Preposing, VP Raising (詳しくは Green(1976) S.383) 参照) というふうに、その種類を細分化して捉えることができるのだが、ここでは大まかに、従属節中の語順の変化と強意の副詞の共起という言葉でまとめて議論を進めることにする。)

なお、ドイツ語では、副文自体が、また副文自体の構造もそれ独自の性格を持っているので(拙著 Usubuchi(1995)S.28) 参照) 、英語で述べられる主節現象をそのまま平行現象として理解することは無論できない。しかしながら、従属節に定型2位の文を許容するしないにおいて、主節現象の一部と捉えられる例が存在する。

(iv)a. Ich glaube, Maria hat ihn entlassen.
b. *Ich bedauere, Maria hat ihn entlassen.
(v)a. Ich glaube, daß Maria ihn entlassen hat.
b. Ich bedauere, daß Maria ihn entlassen hat.
(Usubuchi(1976)S.27)

4. その意味で Green(1976) の動詞分類は面白い。Green(1976) では、MCP の許容度を、従属節の陳述内容に対する話者の同意(agreement)の仕方で段階付けする試みがなされる。すなわち、話者の従属節の陳述内容への意見の一致のの仕方が強ければ強いほど MCP は起こりやすいというわけである(where speaker's agreement with the content of the embedded clause is presupposed, more kinds of MCP will be embeddable than where it is merely

asserted or implied(Green(1976)S.387)。この話者の同意の仕方は主に主節動詞の意味内容から導き出される。(i)は、a-g に従って MCP の許容度が低くなることを表している。

(i)a. Agreement presupposed: emotive factives(regret); 'semi-factives'(discover, realize); wishy-washy factives(know).
b. Agreement asserted: I say, I said; I think; I claim
c. Agreement conversationally implied: X says, X thinks.
d. Neutral: guess, seem, possible
e. Disagreement implied: X claims
f. Disagreement asserted: I doubt, I deny
g. Disagreement presupposed: pretend.

MCP が副文の表す命題（陳述内容）に対する話者の強調が起こるとき最も現れやすいという考え方自体は新しいものではない。Green(1976) の面白い点は、動詞分類に人称を組み入れて話者の同意の度合い(presupposed, asserted, implied)を導き出したところにある。これは、従来の主節動詞だけの分類による説明の試みよりも一歩前進している。しかしこの動詞分類も多くの反例を持つことは、Green自身が論文全体にわたって示唆するところであり、現に本文の(9)-(12)は、彼女自身が挙げる、上の(i)のリストへの反例である。Green によれば、(ia)が(9)-(12)を予測できないのは、すなわち一人称と三人称の場合を区別できないのは、 regret, realize, know などのfactive verbと呼ばれる動詞類においては、それが従える従属節の内容が、同様に前提とされている(eaqually presupposed)からだというが、本当にそうだろうか。私には、I say, I think に対して X says, X thinks を設けたように、 I regret, I realize, I know に対して X regrets, X realizes, X knowsを設けることができなかった理由が今一つ見えてこない。

5. この小説の時代背景から、二人称代名詞 Sie/du の区別は、現代のそれとは違うされ方をしている。

6. 序で述べたように、中学校の英語の教科書で、二人称代名詞 you がとりあえず疑問文でしか登場しないのも、この理由からうなずける。

参考文献：

Benveniste,E.(1971): Problems in General Linguistics. University of Miami Press, translated by M.E.Meek.
Benveniste,E.(1983):「一般言語学の諸問題」みすず書房、岸本通夫　監訳
Green,G.(1973): "Main Clause Phenomena in Subordinate Clauses." In: Language 52. S.382-397

Kahn,G.H.(1973): "On the Theory of the Verb 'To Be'." In: Logic and Ontology. Munitz(Hrg.)

葛西(1995): "いわゆる「主節現象」(MCP) について" Ms.北大

Usubuchi,Y.(1995): "Zur Extraktion aus daß Sätzen." M.A. in Hokudai.

Weinrich,H.(1984): 「言語とテクスト」紀ノ国屋書店、脇坂 豊 他訳

Weinrich,H.(1993): Textgrammatik. Dudenverkag, Mannheim, Leiozig, Wien, Zürich.

Lachlos,C.D.: Gefährliche Liebschaften. Deutsch von Franz Blei, 1985, Diogenes.